

「切手どおり」を求めて

探求心を持ち、目的物があればすぐ行動する
そうすれば、調べたいこと完成できる。

三島良積、元東大教授、切手文化会会長

オーストリーの切手は独特の凹版と、時折見せる多色刷のグラビアで、切手を集めるものにはよく知られている。ウィーンの街中にある国立印刷局では諸外国の転写型の流行する中に電胎版オンリーの製版で凹版の実用版をつくっていて、その繊細な彫刻画線には味のある作が多い。グラビアの方は第二次世界大戦前の風俗シリーズの単色通常切手にはじまり多色刷り時代には外国の切手もずいぶん分刷った。中南米の切手の下にSTAATS DRUCKEREI WIENと小さく入っているのはみなそれである。

ウィーンには国連の機関のひとつである国際原子力機関（略称IAEA）の本部があるが、この活動のあまたある中で、核燃料に関する専門家の作業班があり、これの日本政府代表として私が指名されている関係で、ここのところこの古都を訪れることが多い。

現行のオーストリーの通常切手は「美しいオーストリー」と名付けられるシリーズになっていて、国中の主要な町から風景をえらんで中央に凹版印刷し、周囲を同じ色のグラビアでふちどっている。

このうち一シリングはウィーンの風景である。茶褐色のこの切手の左上隅にはカーレンベルグドルフと入っているが、切手図案の背景になっている山の山頂に一ミリ半位の大きさに画かれているのがカーレンベルグ城である。

ところでIAEAの本部に日本から出向していたF氏（藤井晴雄）から専門家会議にゆく前に手紙が届いて「今度ウィーンへ来たなら是非一度小宅へよってほしい。実は小宅より城（山の頂上に立てられた古い教会）をながめた風景が一シリングの切手にそのままになっているのに最近気がついた。今度おいでの際には一シリングの切手をご自分の目で確かめていただきたい・・・。」氏のアドレスは、ツピリング町一番地 A-1190 ウィーンとある。

一九七七年一〇月、IAEAの本部での用をおわり、昼食にF氏のお宅につれていって頂いた。双子町（Zwillinggasse）はなるほど一番地だけで、二軒同型の家があり、その一つにF氏一家が住んでおられる。中庭に出て、門をくぐって外に出て、左にこの二軒の家をまわるとき、右側の角にある家が切手の右端に画かれている建物である。この建物はオーストリーによくある黄褐色にぬってあるが、これはハップスブルグ王朝の色だと誰かに聞いた。

ここを左折してももの十メートルも歩くと「ここから振り返って下さい」とF氏が言う。まわれ右をしてみると成程、一シリングの切手がそこにあった。

はるかにカーレンベルグ城が山頂に見える。この日はくもりのためやや鮮明を欠くが、まさに切手のおりである。目の前の教会の時計台、左手のつたのからんだ家もそのとおりである。その上うれしいことに、切手では左端に入っている樹木もそっくりで、枝ぶりまで同じなのである。当然の発想として、何とか切手の図案のおりの写真を撮ろうとした。このためツピリング道側の家の塀の上に一本足で立っての軽業的撮影を試みてみた。

地上では切手のように時計台が下まで見えないからである。しかし結局全く一致した構図はえられなかったのは、使う写真機の違いもあろう。そこでF氏に頼んで、マアママ九十五点くらいの構図に自分を入れて撮って頂いたものである。

こんなこともあって、出張の折には切手図案になったところを訪ねて、そっくりの構図で写真をとって来ようと時々試みている。これは銅像とか、一軒の建物とかは何でもないが、風景となるとそうたやすいことではない。日本の中だって中々成功しないこともあるのである。

チェコのプラハに I A E A の会議でいった七八年秋に、同地の二〇年来の切手交換の友に案内してもらって、プラハ城のそばのベルデベール宮殿を訪ね、一九五五年発行のプラハ国際切手展記念の小型シートの中の六〇ハレル切手と同じ角度から「歌う噴水」といわれるこの噴水と宮殿の撮影を試みた。あそこでもない、ここでもない二人で歩き回ったあげくのはて、この噴水がまん中に立っている直径数メートルの六角形の池のへり石に腰かけて、そり返ってあおぐとまさに宮殿の右から三番目の窓のところに噴水が切手の高さにせり出てくることを見つけたのである。日本、チェコの収集家が、並んでここにすわりこんで、「ここだった」とよろこぶ図はまったく何と申してよいやら。さいわい十一月のため池に水はなかった。

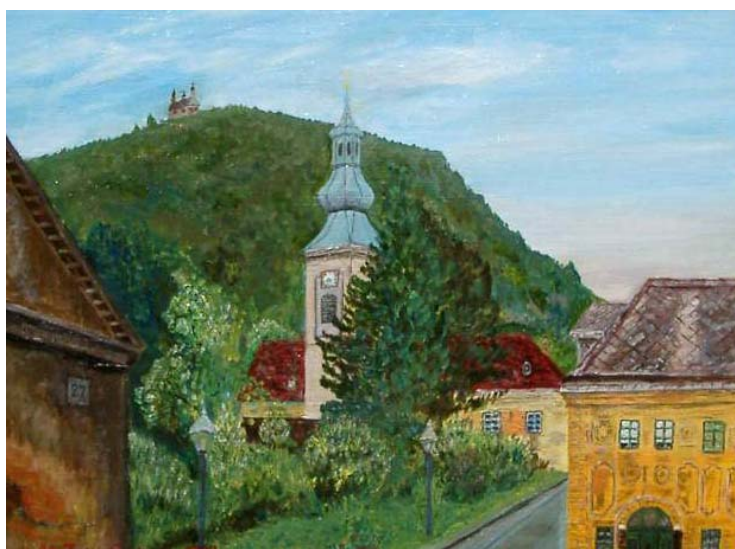
また話はウィーンに戻る。ウィーン名所の一つにプラター公園の大鉄輪というのがある。昔よくデパートの屋上にあった観覧車よろしく、大きい車輪にゴンドラをいくつもくくりつけたのをまわして、のっている人は段々上がって、輪の頂上では下界の展望を楽しむという・・・あれのまた特大の親玉がここプラター公園にあるのである。

この大車輪が一九六六年四月一十四日に出たプラター遊園地二百年記念切手の一シリング五〇の切手に画かれている。そこで灰緑色の凹版一色刷りのこの切手の図案どおりの写真を撮ってやろうというのが課題である。ところが、I A E A の用のすんだ翌日、朝十時の飛行機でフランクフルトに飛ぶために八時に宿を出て空港にゆく途中しか時間がない。そこで送って下さった H 氏に特別にお願いしてプラター公園へよっていただいた。くもりの日の朝の九時前、晩秋ですっかり黄色したウィーンの街をぬけて、公園へ来てみてから「同じ角度」を求めて園内を走りまわること十分ほど、ついに公園の中をぬける大通りの歩道と本道の境の近くから街路樹の枝を左上に入れてのぞむとほぼ満点と判ってパチリとなった。しかし切手が出てからの十余年の間に、切手の右下にある小屋は撤去されてなく、左前方に街灯がひとつ設けられていた。

この投稿は、1979年頃執筆されたと思います。(藤井注)



オーストリアで1975年に発行された1 Shilling (シリング) の切手切手の風景はカーレンベルガードルフ



1978年4月、1シリングの切手と同じ風景を油絵で描いた。1ヵ月間、土曜の朝から夕方まで描いて完成。

三島先生の投稿「切手どおりを求めて」への追記

1997年7月6日 藤井 晴雄

1997年6月中旬、自宅の本箱から原子力切手会の古い会報を出し、何気なく見ていたら、三島先生のお手紙の中から懐かしい投稿文が見つかりました。原子力切手会の資料は、私の机から2メートルも離れてなく、今までに数回、先生のお手紙は何処にしまい込んだのだろうかと見たのですが探し出せませんでした。今回も「探しものは身近から見つかる」の経験則通りでした。1997年冬季号(第21号)でお約束した「三島先によるウィーンの一シリング切手の思い出」をやっと掲載することができました。

私が三島先生から2月4日付けのお手紙を頂いたのは、1979年2月でした。私がウィーンから帰国し、再び四国電力の核燃料部に勤務したのは1978年7月ですから、お手紙を頂いたのは、帰国後1年足らずの時です。お手紙によりますと、先生は逡信協会雑誌に随筆を連載されており、今年で3年目と書かれてありました。先生は1979年2月号「ていしん放談」に、ウィーンやチェコの切手をめぐる「切手どおり」を求めて」を投稿され、雑誌が出るとすぐにコピーを送って下さったようです。投稿文からも、三島先生の探求心の深さとアクションの早さを感じ入っております。これは三島先生の記念ですので全文を掲載させていただきます。

この随筆からも、三島先生の探求心の旺盛さと純真さが生き生きと感じられます。